

『循環器 レビュー&トピックス』 臨床医が知っておくべき 27 の最新知見 赤石 誠, 北風 政史(編)

[評者] 自治医大・学長 永井良三

循環器臨床のカバーする範囲は広い。高齢社会では循環器診療の重要性が増しているが、循環器の患者は、小児から学童、成人、高齢者にわたる。また急性期疾患から慢性疾患のステージに対応しなければならず、内科と外科の診断・治療法に通じていなければならない。このように診療は極めて多彩である。

循環器病学は、EBM の推進に大きな役割を果たしてきた。それは、単に検査値の改善ではなく、死亡率や重大な心血管イベントで評価しなければ、治療法の真の評価ができないからである。このため、いまや循環器医は、分子病態から診断・治療法の進歩、さらに疫学や臨床試験まで視野に入れていなければならないとなった。しかし、循環器病学は毎年、急速な進歩を遂げており、専門医といえどもこれを俯瞰することは極めて困難である。

こうした状況の中で、赤石誠および北風政史の両博士が編集された『循環器 レビュー&トピックス』は、循環器病学の最新の知識を学ぶ上で、出色の小冊子である。序文によると、この冊子の企画は10年前にさかのぼる。当時、医学書院の総合医学誌『呼吸と循環』の企画に、赤石、北風の両博士の参加をいただいたことに始まる。両博士の発案で、「Current Opinion」という連載が始まり、折々の話

題について、文献を紹介しつつ各筆者の考え方を紹介いただいていた。今回の冊子は、最近4年間に掲載された論説の中から、重要な話題をまとめたものである。

本書は、画像診断の進歩、虚血性心疾患、心不全、心筋炎・心筋症、弁膜疾患、不整脈、高血圧の計7章、212ページの構成をとっている。各論説の冒頭には、それぞれの項目の課題や話題が歴史を踏まえて概説されており、それに引き続いて話題と関連の深い最新のトピックスが簡潔に紹介されている。したがって必ずしも最新の知見の紹介にとどまらないため、かつてのトピックスを知る世代にとっても、紹介記事の位置付けが明確に理解でき、読みやすい。

近年、インターネットを通じて最新の知識を得ることが容易となった。このため、活字の出版物が苦戦をしているという。しかし本書のような工夫がなされれば、雑誌や刊行図書の生き残る道は残されている。情報爆発の時代の最新の循環器病学を学ぶために、あらゆる世代の医師と研究者に本書を推薦したい。

● B5 / 頁 232 / 2014 年 / 定価：本体 5,000 円 + 税
[ISBN978-4-260-01931-6] 医学書院刊